

URA の湯遍路旅日記 2010

——台湾・中国・タイに行く——

浦 達 雄

I. はじめに

本報告は、2010年に体験した海外の温泉旅について、湯遍路旅日記風に紹介したいと思う。台湾・中国・タイで体験した温泉旅だが、熱帯のタイでの温泉体験は貴重なものとなった。

II. 湯遍路旅日記 2010

1. 台湾行き (2010年4月)

(1) 2010世界温泉トップフォーラム

台湾苗栗県泰安温泉の錦水温泉飯店（経営は徐享鑫・台湾温泉観光協会前理事長）で開催された「2010世界温泉トップフォーラム」に、2010年4月15日から19日まで出かけた。

2010年4月15日、CX 0565便で、関空から台北へ。11時20分発、13時10分（日本時間14時10分）着の便である。時差は1時間。当方はJTBからチケット（航空運賃78,500円＋空港税等8,770円）を購入したが、隣の席のおバちゃんは4.8万円とのこと。諸行無常を感じた。14時過ぎにお迎えの車で桃園国際空港を出発。雨の中、高速を飛ばして、15時40分苗栗県泰安温泉の錦水温泉飯店に到着。途中から山に入った。ホテルの玄関先で、台湾ではスパレディとして有名な楊麗芳さんのお迎えがあった。楊さんは日本語と英語を話す女傑である。

すぐに5階の会場へ。出席者は100人程度だと思った。日本人は当方と温泉ライターの西村りえさんの2人だけ。18時30分から晚餐会。席上、約20人の方と名刺交換を行った。特に北京市の関係者は5人と名刺交換をした。GWに行くつもりなので…。21時からホテルの展望露天風呂に入った。ここは家族風呂。泉質は旧重曹泉とのこと。

(2) 温泉講座とシンポジウム

4月16日、2日目の講座は9時30分開始。2日間でドイツ・ルーマニア・イタリア・ハンガリー・中国、そして地元の台湾からの専門家の発表があった。発表時間は質問を含めて70分だが、いずれの発表者も時間を20分近くオーバーした。当方の出番は10時50分。結局、スタートは11時30分となった。持ち時間は70分だが、昼飯も迫っており、時間短縮を考えた。テーマは「日本温泉旅館の経営戦略」。結局、発表は50分、質問は10分程度。スライド1枚ごとに楊さんの通訳が入ることにした。14時15分から15時30分までシンポジウム。当方に質問が集中した。地球温暖化は温泉に影響はないのか、日本人を台湾の温泉に呼ぶ方途などである。

(3) 泰安温泉

16時から泰安温泉の見学。最初の見学先は泰安観止温泉会館。1998年4月1日に開業。部屋数は66室。標準料金はB & Bで、1部屋は4,600元（1元は3.3円）。台中でモーター、台南でもホテルを運営するチェーンホテルである。スタッフは17人とのこと。付帯施設として内湯・プール・露天風呂（水着着用）などがあった。外国人は香港・シンガポールなどで、日本人は年間20～30人程度。

17時30分にツアーは終わったが、無理を言って、一番奥に位置する警光山荘の見学を行った。外湯兼宿泊施設である。外湯は100元で、警察関係者は50元とのこと。警光山荘は第2次世界大戦前に日本の警察が源泉に一番近い所に作った施設で、歴史的な温泉施設である。徐さんの話では、台湾全体で18カ所あるとのことだが、別の情報では9カ所らしい。源泉は自然湧出で、60℃程度、浴槽は42℃らしい。のぞくと男性浴室は2人入浴中で、写真を撮った。日本語の分かる人もいた。しかし、時間の関係で入浴出来ず。18時30分ホテル着。夕飯は客家（はっか）料理で、徐さんが客家の出身とのこと。したがって、拘りがあるみたいだ。

ところで、錦水温泉飯店（写真1）は2003年10月23日開業で、設備投資額は約10億円、温泉は地下450mから湧くとのこと。海拔は500mで、シンボルの山は虎山と鳥嘴山。年商は3億円程度、スタッフは45人、部屋数は83室で、家族客対応のフォースも用意されている。温泉水は2万年前の水とか。標準の宿泊料金はB & Bで、1部屋（2人）は3,600元、週末は5,000元。ちなみに、フロントスタッフの給料は2.6万元（食事・宿舎付き）で、政府の基本賃金は2.3万元とか。浴槽には塩素を投入し、安全管理を徹底している。政府の方針で、浴槽は4ppm、プールは7ppmらしい。チェックは月に2回あって、3度違反すると閉鎖とのこと。厳しい規制である。

(4) 新北投温泉

3日目の4月17日は9時36分発で、台湾北部の温泉ツアーとなった。徐さんがガイドで、車中色々説明があった。泰安温泉の近くにイチゴの産地があるとか、2010年12月にはドイツ式の温泉施設が泰安温泉に完成するなど。泰安温泉は汶水溪に沿った温泉地で、日本の黒川温泉を彷彿させた。

11時36分、新北投温泉の水美温泉会館到着。周理事長は台湾市温泉発展協会の理事長で、美系の方だった（写真2）。開業は7年目で、前は北投大飯店とのこと。買収かどうかは不明。通訳はやはり美系の邱さん（写真3）。24歳とのこと。歓迎の昼食は接待料理でお腹一杯となった。徐さんは昼食後、所要でお帰りになった。14時30分から温泉集落の見学。通訳は邱さんが担当した。北投公園・図書館・温泉博物館・露天風呂・地熱谷・加賀屋（工事中）・瀧乃湯（銭湯）などを見学した。地熱谷は強い硫黄の匂いがした。新北投温泉の日本でのイメージは難しい。公園を取り囲むようにして、ホテルが点在し、しかも硫黄泉とくれば、草津温泉のイメージだが…。

(5) 烏来温泉

4月17日の16時30分、新北投温泉から46km先の烏来温泉へ。ここの訪問は1978年以来である。溪谷の温泉をイメージしたが、温泉集落もあった。台湾では人気の秘湯系の温泉らしい。17時45分、烏来瀑布（滝）の目の前にある烏来那魯湾温泉度假飯店着。18時30分から夕食。その前にホテルの周辺を見学した。しかし、温泉集落には行けず。情人（恋人）通路を歩いてみた。夕食は接待で、烏来観光発展協会の高理事長、弟の高教授（国立体育大学）も

夫婦で出席した。21時から温泉入浴。特別室に付帯する温泉施設で、浴槽は源泉かけ流し。

翌朝4月18日は8時スタート。昨夜、もう1カ所の温泉施設の見学を所望したところ、実現した。車で10分の巨龍山荘の大浴場に入湯した。高理事長が関係するホテルである。この入浴時間は8時から未明の1時まで。外湯利用は1人は300元と高い。3人入浴中だったが、隙をみて浴槽を1枚撮影した。

(6) 礁溪温泉

9時15分に巨龍山荘を出発し、今度は東海岸の礁溪温泉へ。付近は温泉熱を利用したネギ・トマトの栽培・スッポンの養殖などが行われている。ここは初めての訪問だ。トンネルの開通で時間が短縮し、人気があっただこと。ちなみにトンネルは2006年6月の開通で、高速道路のトンネルとしてアジア最長らしい。名前は雪山トンネル(全長12.9km)。

10時35分、老爺大酒店(ロイヤルホテル)到着。沈総経理と面会した。ここは5年前に開業。198部屋で、1部屋は300米ドル(B&B)。スタッフは310人。源泉は58℃、湧出量は250ℓ/m、PH6.8とのこと。2004年4月30日の阿岸祐幸医学博士の分析である。オーナーは建設会社(林会長。75歳)で、ホテルは台湾全土で5軒経営。温泉ホテルは知本温泉でも経営とのこと。12時20分から昼飯。場所は郊外の全家福。海鮮料理の店だ。13時40分発、14時30分に台北の兄弟大飯店に到着。今夜の宿泊場所である。到着して問題が発生。アイスランドの火山爆発で、ルーマニアの先生が飛行機に乗れず、台北ステイとなった。その手配で時間を浪費した。

(7) 陽明山温泉

16時45分、陽明山へ。16日の夕食(錦水温泉飯店)の際、台北でレストランを営む泰軒国際餐飲集團の薛総経理から、時間があれば陽明山へ連れて行くとわれ、ガイドを兼ねたスパレディの楊さんをお願いして、連絡をしてもらった。イタリアの先生、楊さんを含めて4人ツアーとなった。彼はタイレストランを営み、北京でもレストランを開業するらしい。

行き先は陽明山天籟温泉会館。山中をドライブして、18時頃到着。ホテル見学を行った。期待した入浴はない。残念…。陽明山は山間部で、日本で言えば箱根のような雰囲気だった。19時頃、ホテルを出発。途中、19時30分、金山の商店街を見学。夕飯は海鮮料理。ご馳走になった。21時30分に食堂を出て、一路台北へ。1時間ほどで兄弟大飯店に着いた。

(8) 散髪、新北投温泉、帰国

4月19日は8時30分から朝飯。フロントで床屋の場所を聞いた。日本語が通じるので、本当に楽だ。「近所で、安い床屋はないか。美人床屋は不用」。結局、徒歩5分程度のところに床屋があった。9時30分から10時15分まで。散髪&黒染で600元だった。その後、迷って、結局、新北投温泉へ。

ホテルに隣接する南京東駅からMRT(地下鉄・モノレール)を利用し、50分ほどかかって、11時30分、新北投温泉駅に到着。交通費は40元。トークン形式だった。これからが忙しい。瀧乃湯まで徒歩で5分、さらに急いで入湯。3分のみ。入浴料金は90元。5人ほど入浴中で、さすがカラスの行水では…。台湾では頭にタオルをのせる習慣はなく、すぐに日本人とばれてしまった。12時発に乗車。ホテルの最寄駅の南京東駅へ12時45分に到着。

空港行きのリムジンバスは13時発なので、ホテルのリムジンバスの受付に行くと「少し待て」と言われる。お客は当方だけだった。その間ロビーで買物をした。ブタのジャーキーである。198元×5袋=990元。牛は辛く、ブタは甘いとか…。

13 時 45 分、桃園国際空港第 1 ターミナル到着。早速チェックイン。スーツケースは 25.7 kg だった。中身は MW で、10 本も入れていた。ホテルの備え付けの水である。あとは発展協会などで頂いたお土産など…。CX 0564 便は 16 時テイクオフ、19 時（日本時間）関西国際空港にランディング。

2. 北京行き（2010 年 4 月）

(1) GW 恒例の北京行き

2010 年 4 月 29 日から 5 月 3 日まで、GW 恒例の北京へ出かけた。この時期の北京行きは 1998 年からで、今回で 13 年連続となる。これまではのんびり旅が主体だったが、今回は意を決し、温泉調査に行くことにした。飛行機は例年だと ANA (NH) のマイレージで行くので、1 万円程度だったが、今回、マイレージはダメで、急遽 JL 便にしたため、8 万円もかかった。ただし、ホテル代は 1 泊朝飯付で 650 元（1 元 = 13 円程度）だった。これは例年 700 円で、4 泊だと 200 元もうけた計算となる。

(2) 郁金香温泉花園度假村

2010 年 4 月 29 日、予定通り、12 時 30 分頃、北京首都空港へランディング。機場快速（空港快速）で市内へ向かった。東直門まで 25 元。その後、地下鉄に乗り換えて北京駅へ。2 元と安い。北京国際飯店には 14 時 30 分に着いた。日本語を話すコンシェルジュりに電話をお願いした。台湾で知り合った北京の温泉関係者に取材をするためだ。一番近い温泉施設の総経理に面会をお願いしたところ、4 月 30 日の 14 時でアポがとれた。通訳は先方が用意するとか。

4 月 30 日 13 時 16 分、ホテル発でタクシー乗車。結局、郁金香温泉花園度假村（通称はチューリップリゾート）には 14 時 10 分に着いた。タクシー代は 80 元だった。温泉施設では総経理の刘さんと通訳の劉氏（貿易会社の副経理）が待っていた（写真 4）。新館の部屋で話を伺った。部屋には温泉があり、早速、入湯をお願いした。劉氏の話では、紹介価格は 1 泊 1,000 元（ルームチャージ）が 600 元とのこと。その後は英語を話す美系のスタッフが施設案内をしてくれた。

チューリップリゾートは北京首都空港に近接した金盞郷に位置し、金盞郷は地方政府が開発計画を練り、1980 年代後半からホテル・ゴルフ場などの開発が進展した。付近は荒地で、農地としての改善が進んでいたが、現在では産業団地として各種企業の誘致が行われている。

経営母体は森恒投資有限責任公司（ゼネコン。マンション開発など）で、開業は 2001 年 6 月、敷地面積は 400 畝（26 万 6,680 m²）と広大である。温泉掘削は 2000 年に行い、掘削の投資額は 400 万円で、現在は 10 倍と言われている。深度は 3,000 m、泉温は 65℃ で、湧出量は 48.6 l/m（70 トン/日）、泉質は硫黄分を含むとのこと。きちんとした温泉分析書があった。主な設備投資は 2001 年に郁金香大酒樓（1 階レストラン・2 階客室 23 室）・客房楼（本館）75 室・温泉別荘（旧館）15 室を整備し、2006 年にはホテル（110 室）、2007 年には水世界（広大なプール）・会議中心（会議場）・農園などを開発した。さらに 2008 年には郁金香温泉別荘（新館）（96 室）を建設し、客室内に温泉施設を付帯して冬の寒さに対応した。2009 年には郁金香会館（骨董品の展示販売・レストラン・会議室など付帯）を開業したが、ここは予約制のレストランで、政府や企業関係者の会議利用が多いらしい。帰りは 418 路のバスに乗った。17 時 5 分発で、東直門へは 18 時 17 分着。ロングドライブだ。0.4 元と安い。（2011

年4月現在、郁金香大酒楼の前から640路のバスが北京駅東まで通じている。所要時間は1時間程度)

5月2日、8時起床。30日に訪問したチューリップリゾートへの質問があったので、劉氏へ電話。結局、11時に行くことになった。タクシー代は90元。先回に比べて10元余分だった。昼飯をご馳走になった。一族郎党の方々が集合し、骨董品を展示する郁金香会館で戴いた。長老の方は政財界に顔の聞く方で、かなりの大物らしい。独特の雰囲気を保たれていた。専属のコックが料理を運ぶ本格的な料理となった。これが中国固有の接待だと思った。

3. バンコク行き (2010年8月)

(1) タイの温泉調査

2010年8月9日から14日までバンコクへ出かけた。目的はラチャプリユックカレッジ(RC)における温泉講座とカンチャナブリー県における温泉施設の調査である。NHのマイレージ使用で行こうと思ったが、希望がかなわず、結局、TG(タイ航空)、しかもビジネスクラスの利用となった。マイレージ6万点という大消費で、本当に痛手となった。

2010年8月9日、関空発のTG673便に22時45分チェックイン。10日の0時5分に搭乗。ビジネスクラスはほぼ満席。0時32分テイクオフ。6時間程度のフライトで、食事は2回。やはり眠れない。8月10日5時50分スワンナプーム国際空港にランディング。時差は2時間で、タイ時間では3時50分となる。荷物は4時46分に受け取ったが、ターンテーブルの近くの椅子で休むことにした。外に出ると危ないと思ったので、4時間ほど待機して、手荷物検査場の外へ出た。8時40分、N氏と通訳嬢のお迎えがあった。10時45分ホテルにチェックイン。空港から75分もかかった。道路は車ばかり。ホテルはノンタブリー(バンコク郊外)のリッチモンドホテル、1泊は3,000バーツ(B)だ。1Bは3円程度。

11時30分から近くのショッピングセンターの中にある「富士」で昼食。お迎えの2人と、RCの国際交流関係のスタッフ2人で昼飯を食べた。5人で534Bを消費した。当方のご馳走である。スーパーでお土産を買った。カップ麺3個入り36B×4=144B、タイコーヒー85B×2袋=170Bで、合計314Bを消費した。

14時からRCで、翌日の講座の打ち合わせをした。通訳の方と細かな言葉の意味を調整した。18時30分から2時間。学長からの接待があった。日本食は3人で7,900Bの消費となった。当方はうな重にした。美味しいと思った。20時30分から1時間ほど散髪をした。染めて1,500Bと高い。学長ご用達の店である。22時閉店らしい。洗髪が気持ち良い。23時10分ホテル着。

(2) ラチャプリユックカレッジ

2010年8月11日は7時50分起床。8時50分ホテルを出て、9時には大学到着。再度打ち合わせをして、10時20分から講義をした。「日本における温泉文化とまちづくり」。通訳を入れて、40分程度の講義なので、これはきつい。謝礼は3,000B。50人程度が受講した(写真5)。女子が多い。日本から持参したお菓子を差し上げた。8人の質問者にはキティちゃんのボールペンをあげた。12時から昼食会。学園の経営会議のメンバー10数人と同席となった。

14時から翌日からの温泉調査の打ち合わせをした。学長を入れて4人。テーマは「タイにおける温泉観光開発」とした。RC側の責任者T氏は「コミュニティツーリズム」と言う訳

の分からない専門だった。会ったと同時に自分の経歴書を出して、自分の自慢を شدしたのには呆れてしまった。温泉調査には N 氏・通訳・責任者 T 氏・ドライバー・付き添い（教員）2 人が参加することになった。19 時から夕飯。場所は MK センターで肉のシャブシャブを食べた。3 人で 785 B。給料の話になって、事務員は 7,000 B、教員は 1.5 万 B らしい。

(3) リバークウェービレッジホテル

2010 年 8 月 12 日 10 時に RC を出て温泉調査へ。目的地は 150 km 先。12 時頃、カンチャナブリーに到着。まず連合軍共同墓地の見学をした。戦争遺跡だ。15 分ほど見学をして、12 時 40 分、クウェー川到着。日本軍が作った橋の見学をした。外国人が多い。映画「戦場にかける橋」で知られる。名目は観光資源調査である。さらに 13 時発で、リバークウェービレッジホテルへ。山道に入った。70 km 先らしい。13 時 50 分ホテル着。フロントで打ち合わせをして、まずは昼食、そして温泉、最後は聞き取り調査となった。昼飯は 14 時 30 分から 45 分程度。温泉行きは 15 時 30 分、18 時からヒアリングを行った。ヒアリングは 1 時間ということで、予め用意した質問表で調査をすすめた。

聞き取りの途中、T 氏が話しに割り込んできたので、制止した。これが気に食わないらしく、後日談だが、道中、タイ人通訳に対して当方の悪口ばかりを話したらしい。悪口の内容をじかに聞きたいものだ。彼には以下のことをお願いしたが、その後の回答は無い。

- ①タイ全体の温泉地数、出来れば名称と場所
- ②タイの温泉を所轄する行政組織と法律
- ③タイの温泉に関する民間組織とその活動内容

リバークウェービレッジホテルは 1975 年の開発で、カンチャナブリーで最初のリゾートホテルとなった。オーナーは潮州系華人で、元々はバンコクでレストランを経営し、財を蓄積することで資本を投下したのである。現在、バンコクでもスパやレストランを経営する。開業動機は緑や山に対する親しみ、休養などであった。

ホテルの敷地面積は 70 ha、延床面積は 5.6 万 m² で、客室は 191 室、300 人収容となる。主な付帯施設はレストラン・会議室 4 ヶ所・プール 2 ヶ所・カラオケ・ゲーム室・ゴルフ練習場・バー/ラウンジ・マッサージルーム・温泉施設などである。温泉施設はクウェー・ノイ川の右岸の山手（船着場から徒歩で 3 分程度）に位置し、付近はジャングルとなっている。ホテルからは船に乗って、5 分ほどで船着場に到着する。

開業は 2008 年 10 月、敷地は 2 万 5,600 m² で、温泉施設は浴槽が 8 ヶ所、いずれもが露天風呂で、水着の着用となる。ハーブ入り・漢方薬入り・ドクターフィッシュ入り・展望・熱め・温めの浴槽がある（写真 6）。今後は浴槽を 5 ヶ所ほど増やす予定である。温泉は村人の話をもとに掘削し、深度は 40 m だが、現在、26 m の水深から温泉が人工湧出している。泉質はイオウ系だが、匂いはなく、むしろ肌触りがすべすべする泉質であった。湧出量は 430 ℓ/m となる。浴槽は毎日清掃をしている。利用料金は 400 B で、入浴料・貸水着・バスタオル・貸ロッカーなどを含む。

ホテルの月商は 500 万 B で、支出の諸費用は 200 万 B となる。客室稼働率は 45% 程度。スタッフは 186 人で、内訳はレジデント・マネージャー 1 人・フロント 16 人・レストラン 60 人・マッサージ 4 人など。フロントスタッフの月給は 700 B で、寮・食事付となる。オンシーズンは 10 月から 6 月まで、オフシーズンは 7 月から 9 月までで、顧客の 50% はタイ人、50% は外国人となる。外国人ではロシア 20%・オーストラリア 10%・イギリス 10%・オラン

ダ10%などが多い。日本人は少ない。大半が1泊の形態で、ロシア人は1週間に及ぶタイ一周ツアーの際に立ち寄るパターンである。2008年以降、外国人は政党によるデモ騒動で減少傾向にある。客層はツアー客40%・個人20%程度で、会議・セミナーによる利用者も多い。ホテルではカンチャナブリー県内のツアーも実施し、スタッフの大半がガイドを行っている。ホテル代は1泊3,000Bだが、ツアー客は1泊3食で1,700Bとなる。宿泊者の温泉利用率は10%に留まっており、今後の課題と言えよう。

19時から夕飯。5人で1,294Bだった。20時30分からミーティング。21時からマッサージ。60分300B。マッサージ嬢は4人らしい。我々の宿泊費は半額で1,500Bとか。ドライバーの話では本日の走行距離は200kmとのこと。

(4) ヒンダット温泉

2010年8月13日、温泉調査後に観光資源調査を追加するというので、7時45分に出発し、8時20分にヒンダット温泉着。ヒンダット温泉はリパークウェービレッジホテルから車で50km、カンチャンブリーより130kmの地点に位置する。ゲート（受付）で入浴料を支払い、車をそのまま進め、温泉の前の広場が駐車場となっている。駐車場の回りは商店や食堂が建ち並び、門前町を形成している。入浴料は外国人50B・タイ人10B。

橋の手前でチケットを示して、橋を歩いて浴槽へ行く訳だが、浴槽は小規模なプールのような露天風呂で、クウェー・ノイ川に沿って4カ所あった（写真7）。その他に個室浴場・脱衣場・マッサージ室などがあった。脱衣場は水浸しで、我々は個室浴場で着替えをした。チップは20BでOK。この温泉は1942年に日本軍が掘り当てた温泉として知られるが、温度は温めだった。受付でヒアリングを申し出たところ、経営主体は村の経営で、担当者は休日で不在とのこと。そこで入浴だけを体験することにした。

露天風呂の足元は河川敷の石だらけで、踏み外すと痛い。川では水遊びも可能。最近、ロシア人ツアーのコースに入っているらしく、我々が帰る頃になって、団体客が男女でやってきて、脱衣場で着替えて入浴をさせた。駐車場に行くと、入る時に勝手に撮られた記念写真を売りつけられた。簡単な交渉で写真は120Bから100Bとなった。

(5) サイヨーク国立公園、ムアンシン歴史公園、帰国

ヒンダット温泉を9時20分に出発し、行き先はサイヨーク国立公園（サイヨーク・ヤイ滝が一番の見所）、ムアンシン歴史公園など県内の観光資源調査に出かけた。昼食はクウェー川のほとりで、映画「戦場にかける橋」で舞台となった橋を眺める水上レストラン。5人で1,000B程度。チップは40B。17時20分にはRCに到着。近くでマッサージをした。時間が無いので半分に短縮して45分間は200B。18時45分から北タイの料理を売りとするレストランで夕飯。4人で389Bだった。19時30分大学発、20時10分空港着。早速、TGにチェックイン。TG642便で、23時10分搭乗で、都合で成田行きだ。3時間ほどラウンジで休憩。23時50分搭乗。読売新聞（衛星版）情報ではチェンマイのサンガンペーンが一番有名な温泉地らしい。

4. 再び北京行き（2010年9月）

(1) 9月の北京

2010年9月2日から6日まで北京へ出かけた。今回は完全休養の予定が、通訳の方が登場したので、5月に続いて温泉調査となった。飛行機はNHで、マイレージ2万点を使用した。

2010年9月2日、現地時間12時頃、NH159便は予定通りに北京首都空港へ着いた。空港で通訳の王女史（老留学生）と待ち合わせをした。王さんは群馬県の大学の大学院に在籍しているが、恩師夫妻の北京滞在のお世話をし、先生の帰国のお見送りで空港に来ていた。宿泊先の北京国際飯店には14時30分頃チェックイン。1泊は658元（食事無し）。3万円を両替した。3万円は2,334.48元で、1万円は778.160元と高い。円高のおかげだ。

(2) 中国温泉旅游協会

王さんに温泉ホテルの調査の件で、部屋から電話をしてもらった。予定では9月3日は北京蟹島緑色生態度假村（蟹島リゾート）、9月4日午前は中国温泉旅游協会、午後は小湯山温泉。しかし、小湯山の総経理は出張中で連絡がつかず。結局、2日16時30分から中国温泉旅游協会を訪問した。面会の相手は、2009年11月の横浜で開催された国際温泉会議において面談して浴衣を差し上げた秘書長で、一応旧知の仲である。45分ほど話しをして各種資料を頂いた。事務所の小姐も同席したので、お土産を差し上げた。

その後、書道家（印章彫り師）の王師傳に電話して、18時に夕飯となった。ホテルからのタクシーは25元。夕食はいつもの瑠璃廠。3人で130元。王女史はしきりに不味いを連発した。王女史の話では、王師傳は1981年に1,000元/月の収入があり、85年には200万円の財産があったとか。祖父は有名な書道家で、王師傳は才能を認められたとか。しかし、悲しいかな、祖父は紅衛兵に殺されたという。交際9年目で初めて聞いた悲しい話である。言葉の障害は実に厳しいと思った。彼らは話の最中に何度も握手をしていたが、たぶん彼の話に彼女が感動したに違いない。この情報は王女史のおかげである。多謝。ちなみに王師傳は王女史のことを日本語で「古参」と称した。

(3) 北京蟹島緑色生態度假村

2010年9月3日、蟹島リゾートは9時30分の予約で、8時頃、滞在先の北京国際飯店からタクシーに乗った。朝から大雨である。70分ほどで、蟹島リゾートに着いた。タクシー代は95元と高い。場所は首都空港の近くだ。姜総経理から1時間ほど話を伺って、その後、1時間ほど施設見学をした。

蟹島リゾートの開業は1988年8月22日で、経営母体は北京蟹島集団で建設業・農園などを経営する。敷地面積は3,180亩(212万106m²)と広大である。主な設備投資としては、1988年に老蟹楼（蟹・魚釣り場）・開飯楼（レストラン）を開発し、スタートした。その後、2000年に農庄（四合院）・蟹泉池（浴場・プールなど）、続いて、2005年に体育中心・会議楼（客室445室）、2008年に温泉会館（客室77室）・三点鐘農業園（レストラン付帯）、2009年に温泉会所（客室24室）、2010年にオートキャンプ場を整備した。温泉会所は各室露天風呂付で、和室も整備している。

経営数値をみると、年商（2009年）は4億元（52億円）を数え、毎年15%アップ率を誇る。年商の内訳は宿泊50%・レストラン30%・その他（温泉・農園など）20%なる。シーズンは会議・温泉9月～2月、オフ3・4月、農園・スポーツ5月～8月で、市場は北京市民40%・会議（政府・企業）60%で、会議は北京を主として全国に及んでいる。聞き取り調査が終わって、11時30分、タクシーに乗車、北京駅へ向かった。やはり94元程度。

(4) 紅樞山庄

2010年9月4日、結局、小湯山へ行くことになった。しかし、当方の情報が古く、安定門から912路のバスが無く、大あわてをした。先方へ電話して行き方を確認し、結局、地下鉄5

号線の天通苑北で下車し、バスに乗った。さらに途中で下車し、次は輪タクに乗った。輪タクは10分ほどで8元。

行き先は紅樞山庄。王総経理と面会をした。彼はオーナーを兼ねており、1976年生まれと若い。10時30分から1時間面談し、そして昼飯をご馳走となった。地産地消の野菜が主体で、感謝感激。その後施設見学をして、入浴とマッサージを体験した。入浴はホテルの客室付帯の露天風呂で、薬草が入っていた（写真8）。面談の席上、小湯山鎮人民政府が発行する『小湯山 中国温泉之郷』という小冊子を頂いた。この本によると、小湯山は、2005年11月、中国鉱業联合会から『中国温泉之郷』と命名されたとか。中国全土で命名をすすめているらしい。

開業は2005年10月28日、投資額は7,000～8,000万元。現在までの総投資額は2億元。2004年に掘削した温泉は地下2,300mで、60.5℃、硫黄泉らしい。投資額は280万元で、いまは400-500元とのこと。将来、銀山地区（昌平区の中心から更に東北へ30km）でリゾート開発を予定しており、開発図と計画書を見せてくれた。いわゆる山のリゾートで、オートキャンプと温泉を売りにするようだった。機会があれば、経営指導をお願いしたいとも言われた。

ところで、小湯山界限は大規模開発が行われ、マンションまで出現し、驚いてしまった。開発の際の立ち退き料は住民1人当たりで10万元/年を保障とのこと。小湯山の知名度の大きさが高額保障とのこと。その後、車を利用して付近の案内があった。小湯山で最大規模を誇る九華山荘の下車見学や小湯山の集落内の車窓見学をした後、天通苑北まで送ってもらった。17時30分には地下鉄北京駅へ着いた。菊水亭で和食の食べ放題88元を食べた。駅前のスーパーで瓜子（135gで4.6元）を買った。缶ビールは5元。後日談だが、瓜子は精力がつくらしい。

5. 山西省太原、そして北京行き（2010年10月）

(1) 初の太原

2010年10月14日から18日まで、中国山西省太原に出かけた。王師傅の故郷である。当初、山西省政府の招待「2010海外学子実業家山西行」であったが、結果的には山西大学の招待となった。例のパターンで、日本から太原までの交通費は自己負担、太原滞在は山西大学の負担である。今回は現地の手配・通訳などで王女史が同行し、お世話を頂いた。王さんは12日に中国入りし、省政府の仕事をこなし、当方の担当も行った。

飛行機はマイレージ3万点を消費した。行きがエコノミー、帰りがビジネスという変則パターンである。帰路はエコノミーが取れなかったからだ。北京-太原間はJTBに手配をお願いした。飛行機代は12,810円である。

2010年10月14日、NH159便で関西国際空港から北京へ向かった。お昼過ぎに首都空港に着いたが、太原への乗り継ぎは17時30分のフライト。第3ターミナルに着いたが、太原は第2ターミナル発となる。無料（無料）バスで第2ターミナルへ。ここは以前の国際ターミナルで、旧知の場所だ。床屋を探したが、見当たらず、結局、地下1階で按摩を行った。90分コースで、336元もとられた。チップを入れて350元。按摩は15時30分に終了。15時45分、G17でチェックイン。MU5296は17時30分出発。

飛行機は18時42分、太原にランディング。山西大学の朱教授と王女史の出迎えがあった。

19時30分ホテルにチェックイン。ホテル名は晋昇苑酒店。20階建のホテルで、2010年にオープンしたばかりらしい。20時から食事となった。お粥の店で、これはありがたい。チベット日多温泉の李総経理が同席した。当方に会うために、ラサから夫婦で来たとか…。ラサからのチケットは往復で5,000元程度らしい。21時10分にホテル着。22時には就寝。風呂はシャワーだが、水がフローアに溢れてしまった。新ホテルのわりに造作が悪い。

(2) 2010 海外学子実業家山西行

2010年10月15日は7時に起床。9時15分から10時20分まで王女史に付き合っ、[2010 海外学子実業家山西行]の会合に参加した。50人程度がいた。責任者である岳主任の紹介を受けた。彼は温泉にも興味があるらしい。彼の話では山西省には10カ所の温泉があり、北では奇村が有名とか。現在、中国には100程度の温泉企業があるらしい。岳主任からは、大学教員の肩書き以外に何かないのか、と聞かれた。その際、顔写真付の「別府八湯温泉道初代名人」の名刺を差し上げた。笑いは頂いたが、これは効果なしで、経営とか開発とかの会社名や代表とか主任などの肩書きが必要らしい。そう言えば、初対面では「今後、色々と経営指導をお願いしたい」と言われるが、その後の展開はなく、きっと社交辞令に違いない。

10時20分から朱教授、チベットの李さんの3人で、色々と話をした。主な話題はチベットの温泉のことで、現在、チベットには大型温泉は2カ所のこと。李さんは自分の温泉施設の活性化を考えており、色々と知恵が欲しいらしい。源泉は自然で100本程度、湧出量は2,000ℓ/m (3,000トン/日) とのこと。

彼は日本に興味があるらしく、温泉病院・ヒ素の多い温泉・温泉の素製造工場などの見学、さらに医療用の水質基準の確認などをしたいと申し出た。10日から14日程度の日本旅行を考えているらしい。お礼に温泉の素、温泉ミストを大量に頂いた。そして機会があればチベットに来て欲しいと言われた。12時20分から14時45分まで昼飯。6人が参加。

(3) 山西大学で温泉講座

15時10分から山西大学で話をした。受講生は100人程度。告知だけとのことで、大勢の学生が集まった。学生は全寮制で暇らしい。当方は40分(通訳込み)の話をし、質問は30分。10人から質問を頂いた。1年生から4年生までいた。質問の先着5人の学生に対して、ボールペンを差し上げたが、用意した5本では足りなかった。かなり本格的な質問もあった。その後、17時40分までチベットの李さんの話。学生は熱心だ。終わってから、山西大学歴史文化学院の各座教授の称号を頂いた。最近の日本人では、高名な溝尾先生の次らしい。18時から散髪。髪を染めて35元だった。時間は60分程度。20時から夕食。薬膳料理をご馳走になった。6人が出席。チベットの李さんの温泉施設の年商は180万元。毎年30%アップらしい。

(4) 大营温泉一泉山荘

2010年10月16日は7時起床。7時35分から朝飯。8時チェックアウト。2泊は561円で、支払いは山西大学。8時30分発、高速道路を80kmほど飛ばして、原平近くの大营温泉の一泉山荘という温泉団地を見学した。10時45分到着。温泉団地にはホテル棟が整備され、建物は33棟ほどあった。1棟を半分に分けて、それぞれがホテルを運営していた。1ホテルは7室程度で、1泊は50元と安い。部屋によっては温泉浴槽があった。団地の中央部に未来水世界(プール)もあった。ここは2007年4月1日に正式開業し、現在の時期の入場料は20元と安い。

(5) 鳳凰山生態植物園

11時30分に出発し、鳳凰山生態植物園に行った。12時10分到着。2002年開園とのことで、山西大学と交流があるらしい。楊総経理の接待にあった。農園の食材を活用した料理を載せて、園内を見学した。その際、色紙を書いた。「中国3大パワースポットに認定します」と書いた。ここはマイナスイオンも多いらしいので…。さらに、記念樹を登録した。1本は100円で、2本にした。「温泉」「観光」をテーマにした。

投資額は1億元、全体の敷地面積は114万亩（1亩=666.7m²）で、植物園だけでも8亩（1亩=666.7m²）の広さがある。北・東・西が山で囲まれ、南に川が流れ、風水では最高の立地条件として知られる。部屋代は160元/人で、食事代は平均60元とのこと。5-7泊のスタイルが多く、大半が太原の顧客とのこと。美しい環境・美味しい空気・マイナスイオンがあって、快適な生活が楽しめるとのこと。スタッフは社員52人、パートは付近の住民300人ほど。開発前は1家族1,000元/月の収入だったが、開発後は雇用機会の増大で、20万元/年とのこと。スタッフのサラリーは5,000元/月と高い。

温泉の開発現場も見学した。泉温は60℃、深度は120m。河川敷に沸いていた（写真9）。付近は湿原で、中国では珍しい場所だと思った。開発計画案に対してコメントを求められた。大規模な露天風呂よりも小規模な露天風呂（裸湯）をすすめたが、良い返事はもらえなかった。

17時15分に出発し、18時54分から太原で夕飯。5人で食べた。餃子だった。美味しい！20時30分に太原駅到着。21時30分に夜行列車出発。チケットは寝台の下段で149元だった。上段はもっと安いらしい。22時就寝。トイレに3回行った。トイレは汚い。

(6) 北京龍脈温泉度假村

太原からの夜行列車は2010年10月17日8時15分、北京駅到着。まずは王女史が駅前のYHにチェックイン。ネットでは248円で予約したとか。本当は298元らしい。9時に朝飯。真切夫と言ういつもの食堂だ。以前は田野屋と言ったが、業態変えとなったみたい。食べ物は豆乳とお粥などにした。2人で15元程度。今度は10時に当方が北京宝辰飯店にチェックイン。ホテルは客室が空いておればいつでもインは可能らしい。

10時30分から地下鉄に乗って、5号線の天通苑で下車。その後、タクシーに乗って、11時35分、小湯山に着いた。タクシーは12.4kmで、33元だった。さっそく徒歩で旧集落へ。道路が拡張されたが、集落構造は同じだった。村の浴池は玄関を変えて健在だった。地元民は1元、部外者は6元。元の浴池は名前を変えていた。個室風呂は60元らしい。集落のはずれの広大な公園の中で、「中国温泉之郷」の記念碑を発見。早速、写真撮影を行った。

13時、北京龍脈温泉度假村（龍脈リゾート）の見学と聞き取り調査。王副経理と面会した。時間は15時まで。同社の経営者は河南省の出身、専門業種は不動産開発で、マンション・別荘の開発を得意とする。1980年代後半から珠海・河南で開発を行い、その後、青海・内モンゴルなどでも事業を展開しているらしい。

龍脈リゾートは1993年から開発を行い、開業は1996年1月18日で、外来資本第1号とのこと。小湯山の開発者は80%が外来者らしい。リゾート全体の設備投資額は1億元で、温泉は1993年に掘削し、深さは地下500m、湧出量は1,333ℓ/m（1,920トン/日）、掘削の費用は100万元とのこと。別荘販売が特色であり、敷地16万m²の内、7万m²が分譲地となる。宿泊施設はホテルの他に別荘・行宮などがある。行宮は四合院の造りで、高級感を演出し

ている。スタッフは 700 人で、その他パートが 300 人と多い。勤務の形態はホテル部門と温泉部門、さらには別荘部門に分かれている。フロントのサラリーは 2,000 元となる。

2010 年の年商は 1 億元で、2009 年の 9,000 万元を上回る。オンは 1・2・11・12 月、7・8 月（プール）、オフは 6・9 月となる。収入では 70% が会議、温泉は 30% となる。市場は北京が 50% を占める。利用人員は 50 万人/年で、温泉は 30 万人、会議 20 万人となる。

別荘の購入者は 70% が北京市とのこと。別荘は規模によって異なるが、一戸建スタイルは 1 m² 当たり 2.6 万元、マンションスタイルは同 1.8 万元となる。規模は前者が 400-700 m²、後者が 60-130 m² となる。大半はプール付である。

開発の歩みとしては、1993 年の別荘開発、1995 年に水泳館（龍脈温泉楽園）、2003 年にホテル（会展中心）、2003 年に竹林館（露天風呂）を整備した。竹林館は以前の釣り養殖場で、これを用途変更したものである。健康志向が向上し、温泉を目玉にして今後の展開を図ること。付近の土地は、開発当時 5 万元/m² だったが、現在は 500 万元/m² に値上がりし、資産価値が著しく向上している。

(7) 再び紅櫨山庄

15 時 10 分、輪タクに乗って紅櫨山庄へ。輪タクは 10 元。旧知の王総経理に面会した。北京に来たのに連絡をしないとされたくないので…。その割には普通の対応だった。地価を質問したところ、自分のところは村からの借地で、1 万元/亩（666.7 m²）、つまり 15 元/m² のこと。購入となると 100 倍の 100 万元/亩（666.7 m²）、つまり 1,500 元/m² らしい。年商は毎年 30% アップで、儲けは 15% とのこと。地下水の使用料は 40-60 元/1 トン。

経営方針としては、我が家と思って宿泊し、従業員には家族と思って働いて欲しいとのこと。悩みはどこでもそうだが、中間管理職の人材育成となる。自分の悩みとしては休みがとれないこと。月に 2 回取れば良い方らしい。

16 時に社用車で送ってもらって、地下鉄を乗り継いで、17 時 30 分に北京駅到着。駅前のスーパーで買い物をした。瓜子 110 g は 4 元、90 g は 3 元で、それぞれ 5 袋買った。ビーフジャーキー 60 g は 8 元。CROCS は何と 28 元。最後の 1 足なので値を下げたらしい。将棋を買った。20 元が一番高い。王女史は日本で待つ子息のために色々な食料品を買っていた。18 時 20 分から反省会。菊水亭の 88 元の食べ放題にした。20 時解散。

(8) 看電子、帰国

2010 年 10 月 18 日、珍しく 8 時起床。昨夜の中国の TV では尖閣がらみの東京でのデモの様子が放映されていた。ちなみに、テレビを見ることは北京語で「看電子」と言う。聞き取り調査の整理をした。10 時 30 分チェックアウト。地下鉄 2 元、機場快速 25 元を乗り継いで、11 時 25 分には北京首都空港に着いた。切符売り場でメトロカードの 50 元のチャージをした。

帰路はビジネスクラスで、これは「ありがた迷惑」だった。NH 160 便は 15 時 15 分テイクオフ。機中、新聞で 10 月 16 日（土）の中国での反日のデモの記事を読んだ。デモは若い連中らしいが、1960 年代の学生の反米デモを思い出した。18 時 40 分関西国際空港にランディング。

Ⅲ. おわりに

おわりにあたって、マナーについて一言。温泉入湯のマナーは国や地域で異なる。露天風呂の大半は水着着用で、戸惑うことが多い。そして、タオルを頭に乗せる習慣は日本だけだし、台湾の場合は、女性は頭にシャワーキャップをしないとイケない。中国ではスリッパを履いたまま湯船に向かい、入る手前で脱ぐことになる。面白いというか、ユニークというか、温泉文化の違いである。

付記：本報告は、今日新聞（別府市の夕刊紙）の2011年正月号に掲載した記事を修正したものである。



写真1 錦水温泉飯店の外観

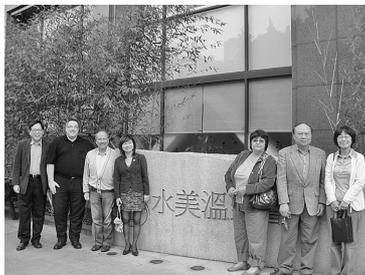


写真2 2010世界温泉トップフォーラムの参加者（新北投温泉・水美温泉会館）



写真3 通訳の邱さん（地熱谷）



写真4 総経理の刘さんと通訳の劉氏（北京・チューリップリゾート）



写真5 ラチャプリュックカレッジの学生

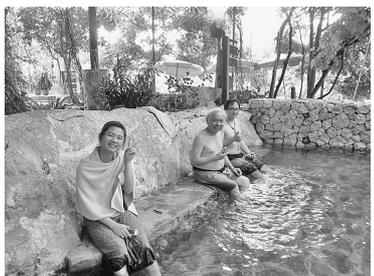


写真6 ドクターフィッシュ温泉（リパークウェービレッジホテル）



写真7 川に沿った露天風呂（ヒンダッド温泉）



写真8 客室付帯の露天風呂（小湯山・紅檜山庄）



写真9 河川敷に湧く温泉（山西省・鳳凰山生態植物園）